

## NZ・オタゴ大学地理学教室のカリキュラム

著者	佐藤 典人
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	58
ページ	53-63
発行年	2009-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/3529">http://hdl.handle.net/10114/3529</a>

# NZ・オタゴ大学地理学教室のカリキュラム

佐藤典人

## I. はじめに

南半球のニュージーランド(=NZ)は、間々、地理的要素の多くの面で日本と似通っていると口にされる。察するに、その根拠は両国とも中緯度の温帯地域に位置する(第1図参照)島国ゆえであろう。加えて、地球科学的には双方とも環太平洋造山帯に在ってプレートの境界に位置し、脊梁山地が島の長軸方向に伸長して、地震や火山活動も頻発しやすい。かくして、それらに起因する自然景観も多く目につく。しかしながら、両国とも西風の卓越する中緯度帯に相当するものの、風上側に広大なユーラシア大陸が存在する日本列島と片や大海原のインド洋が広がるNZとでは、気温の年較差を典型として、いささか相違する点も多々ある。このように自然環境の細部に目を転ずれば、日本とNZとは必ずしも近似しているわけではない。この点に関する説明はすでに拙稿(2000)で一部触れている。

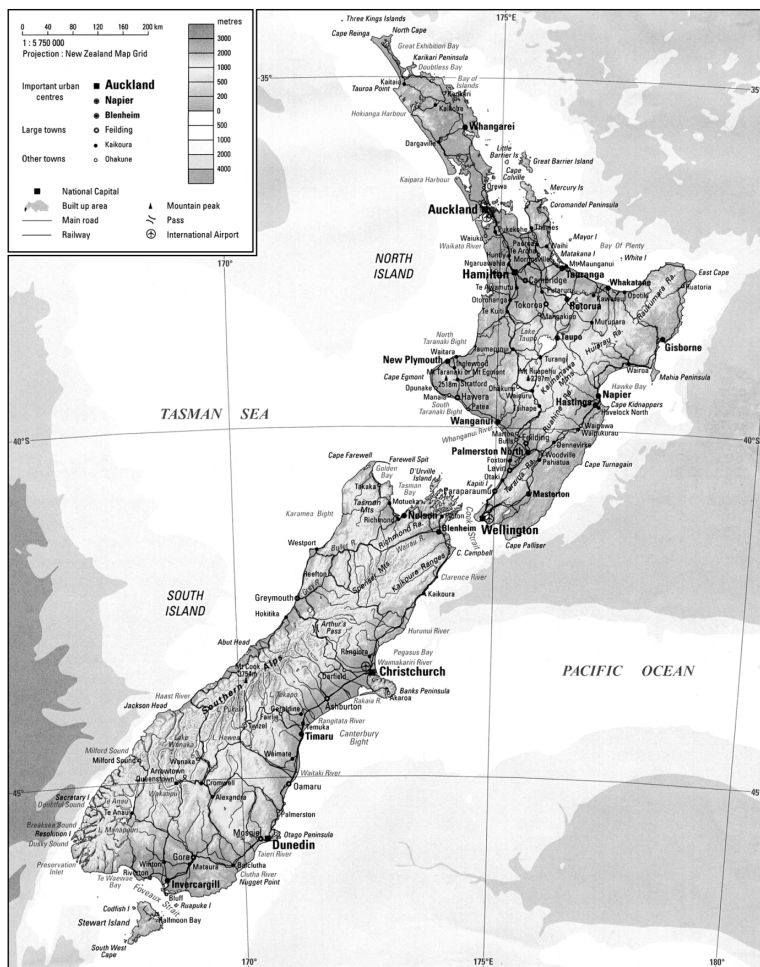
またNZと言えば、その行政改革の断行で日本も少なからず関心を寄せて、これまで多くの政府関係者がこの国を訪れた。とりわけこの国の鉄道交通や郵政事業の改革は、当時、広く世界の耳目を集めた。しかし、これには日本の国土面積の7割程度(27万km<sup>2</sup>)の広さに400万人弱にすぎない人口を抱え、しかもその人口の大半が都市域に居住するというNZならではの特殊事情が大きく関与している点を見逃してはならない。

周知のように、先住民であるマオリ族の居住地であったこの島嶼に、いわゆる『探検時代』のオランダ人・タスマンによる発見を経てヨーロッパ

人が渡来した。その後、1840年にイギリスの直轄植民地となり、さらに英連邦自治領を経て、1947年にイギリス連邦の一国としてNZは独立した。その過程で、ゴールドラッシュの折などにイギリスをはじめとする国々から多くの人々が移住して住みつき今日に至っている。前述のように、この国では都市人口比率が高いけれども、国の農・畜産業を支えている遠隔の地方住民の子弟への教育問題に対処するため、通信教育制度が充実している。また近年のこの国の人口増加率は決して高くない。それゆえ、このような状況はこの国の教育事情にもそれなりに反映されている。ここでは、NZ南島南東沿岸部のダニーディン市に構えるこの国最古の大学であるオタゴ(Otago)大学の地理学教室に着目して、カリキュラム等を紹介・対照することを目的とする。それは同時に、本学地理学科のカリキュラムの在り方やその内容検討に資する側面と関連するからである。

## II. NZの高等教育とオタゴ大学設立の背景

元来、ラグビーフットボールはイギリスを代表するスポーツの一つであるけれども、イギリスから移り住んだ国民がベースとなって独立したNZの経緯から、今日ではそれがこの国の国技になっている。とりわけこの国の代表(=オールブラックス)は、常に世界のトップに君臨しようとする自意識が極めて強い。かくして最近の日本の社会人チームのラグーマンには、NZ出身の、しかもオタゴ大学出身のプレイヤーが少なからず所属してチームの中核を占めている。



第1図. ニュージーランドの地理的位置と概略

(R.Kirkpatrick:1996. による)

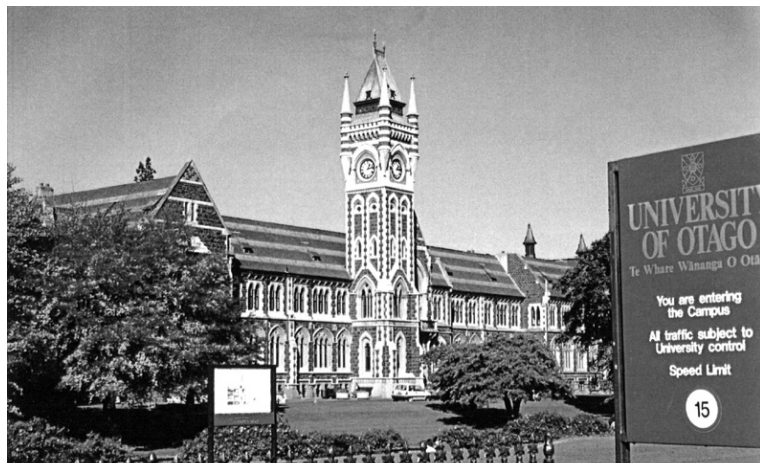


写真1. NZ・オタゴ大学のクロックタワー

(2005年3月筆者撮影)

南島オタゴ地方の中心都市であるダニーデン市には、19世紀中頃以降のゴールドラッシュ時代にオタゴ半島やオタゴ地方内陸部で金鉱が発見されたことも手伝って、スコットランドを中心に多くのヨーロッパ人が移住した。NZでも南に位置するダニーデン市の気候が冷涼多湿ゆえに、スコットランド人にはその点で母国を体感でき、気候的順応も容易であったのだろう。イングランドからの移住者の比率が高い南島最大の都市であるクライストチャーチとはこの点で対照的である。オタゴ大学の象徴である本館クロックタワー（写真1参照）に代表される市街地の古い建造物には、スコットランド風のゴシック調建造物が多く、これがこのダニーデン市の特徴として建築学の関係者にはよく承知されている。

南部太平洋に突き出たオタゴ半島とその入り江のなすオタゴ湾の湾奥に立地したダニーデン市は、上述のとおりゴールドラッシュ時の物資の積み出し港としては適地であっただろう。この街には平坦部がやや少なく、背後の丘陵地が沿岸にまで迫って坂道が多い。このような港町としての地形的特徴の共通性から、現在ダニーデン市は日本の小樽市と姉妹都市の締結をしている。

ところで金鉱発掘を念頭に入れた新しい土地の探索には何が求められたであろうか。まず想

定されるのは地質学や地理学の知識であり、次に金鉱の掘削で粉塵の吸引を余儀なくされる鉱夫のために、医学のそれも要請されたと考えるに難くない。事実、1869年にNZ最古の大学として創立したオタゴ大学には、上記の3つの分野が旧くから開設されて、国内外にその存在を知らしめている。それゆえに本館のアーチウエーのゲート上にも『地理学』を現わすシンボル像（写真2参照）が埋め込まれている。もっとも、オタゴ大学内で『地理学』が一つの学科・教室として単独で設置されたのは後々の1946年のことである。

発掘された金鉱の規模にも左右され、ダニーディン市は当時の国人口に占める人口比率を今日まで維持し続けることはできなかった。つまり、ダニーディン市はその後、内陸部からの農・畜産物の積み出し港以外にはさしたる産業にも恵まれないまま、人口も減少の一途を辿り、今日の12万人弱へと低下した。それと引き替えに今では2万人前後の学生を抱えるオタゴ大学を核とした学園都市へとその性格を変容させている。現在、NZの大学はすべて国立であり、その創立順に以下の8大学が存在している。


【大学名】	【都市名】	【創立年】
オタゴ大学	（ダニーディン／南島）	1869年
カンタベリー大学	（クライストチャーチ／南島）	1873年
オークランド大学	（オークランド／北島）	1882年
ヴィクトリア大学	（ウェリントン／北島）	1897年
ワイカト大学	（ハミルトン／北島）	1964年
マッセイ大学	（パーマストンノース／北島）	1964年
リンカーン大学	（クライストチャーチ／南島）	1990年
オークランド工科大学	（オークランド／北島）	2000年

ここでこの国の高等教育へしばし目を転じてみたい。既述の行政改革とともにNZでは20世紀最後の10数年間に教育改革へも着手した。その背景



写真2. NZ・オタゴ大学本館のゲート上の『地理学』のシンボル（地球儀が地理を象徴している。2005年3月筆者撮影）

には国としての人口増加率の低下が伺われ、その高等教育への影響が近未来に波及するのは必定ゆえ、早急な対策が不可避となったのであろう。い

		初 等 教 育						中 等 教 育						高等教育	
年 齢 (歳)		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
学 年 名 (年)		ジュニア		スタンダード				フ   オ   ー   ム							
		1	2	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7	
各 学 校 と 校 内 の 学 年 数	小   学   校	フ   オ   ー   ム   学   校						大   学							
	1   2   3   4   5   6 年   年   年   年   年   年						中学校		高   等   学   校				大   学 高 等 専 門 学 校		
							1年2年								
	初   等   学   校						教 育 大 学								
	1年2年3年4年5年6年7年8年														
	地 域   学   校						中学校		1   2   3   4   5 年   年   年   年   年				成 人 教 育		
							1年2年								
							フ   オ   ー   ム   学   校								
							1年 2年 3年 4年 5年 6年 7年								
1年2年3年4年5年6年7年8年9年10年11年12年13年															
通   信   教   育   学   校															
1年2年3年4年5年6年7年8年9年10年11年12年13年															
私   立   学   校															
1年2年3年4年5年6年7年8年9年10年11年12年13年															
義務教育		—— 義 務 教 育 ——													

注 幼児学年の前に学齢前の幼稚園・プレイセンタが2年ある。また、学年名は5歳をイヤー1、そしてそれ以降17歳の学年をイヤー13とする通しの呼称に改められる方向にある。

第2図. NZの学校制度の概略（青柳まち子編:1997. による）



ずれにせよ、国としての規制を緩和する一方で、大学の授業料の無料化や大学へ子弟を進学させている保護者の税負担軽減などの措置は近年見直され、しかも、自国の若年人口の減少分を近隣のアジアや遠く南米の国々からの留学生受け入れで補填しようと転換してきた。この背景には個々の大学間の競争と自助努力を促している一面が瞥見される。よって、NZ への私費留学ではそれ以前に比較して語学力などのハードルがやや低くなったのと裏腹に授業料が高騰した。つまり、国単位の人口増加率の推移や年齢別人口構成比などの要素の比重が、教育財源の確保の面でも高い影響力を占める現れと言える。これは日本の山間地域などでの社会基盤の存続・維持への困難さと重複して目に映る。

18 歳を過ぎて更なる勉学を望む者は、大学、高等専門学校、教育系大学などへ進学が可能となる。ここで登場した高等専門学校は NZ の教育制度における一つの特色にもなっており、『ポリテクニク』と呼称されて国立と私立がある。これは高度な職業専門学校とも換言でき、全国に 20 校余り展開されて、ここから大学への進学も可能である。しかも、所定の必要条件を満たせば、学位授与も可能な点が極めて特異である。前述の 8 番目に開校されたもっとも新しいオークランド工科大学の前身はこのポリテクニクで、それを経て設立された大学である。なお、教員養成系の学校も数校別途に存在しているが、近年徐々に近隣の個々の大学の教育学部へ併合されつつある。

また忘れてならないのは、前述したように国民の多くが都市域に居住しているけれども、遠隔の地にまったく人が住んでいないわけではない。とりわけ、この国の主要輸出品目に登場する農産物や羊毛・酪製品を支える農家などの師弟、なかでも満 5 歳からスタートする義務教育段階での児童への教育が NZ では一つの大きな課題であった。結果的には、国として地方の僻地居住者へ通信教育学校で対処する手段を選択した。かくして、この国の通信教育のシステムには学ぶ点が多々ある。なお、この国の学校制度の概略を第 2 図に示した。

### Ⅲ. 地理学教室のカリキュラム

ここで紹介するオタゴ大学は次のような学部・学科から構成されている。

\* Division of Commerce

⇒ Commerce

\* Division of Health Sciences

⇒ Dentistry

⇒ Medical Laboratory

⇒ Medicine

⇒ Pharmacy

⇒ Physiotherapy

◆ Division of Humanities

⇒ Arts and Music

⇒ Law

⇒ Theology

⇒ Education

\* Division of Sciences

⇒ Consumer and Applied Sciences

⇒ Physical Education

⇒ Science

地理学教室は上記の“Division of Humanities ⇒ Arts and Music”に属しており、この“Arts and Music”において多くの専攻の一角を占めている。それらの専攻を以下に掲げておく。

Anthropology, Art History & Theory, Asian Studies, Biblical Studies, Chinese, Classics, Community & Family Studies, Computer Science, Design Studies, Economics, Education, English, English & Linguistics, French, **Geography**, German, Hebrew, History, Information Science, Japanese, Languages & Linguistics, Linguistics, Maori Studies, Mathematics, Modern Literature & Film, Music for BA, Music for MusB, Philosophy, Political Studies, Psychology, Religious Studies, Russian Language & Culture, Statistics, Theatre Studies, Women's Studies. (計 35 専攻)

この大学における『地理学』専攻の学部段階における大枠のプログラムは第3図のようになっている。1997年度時点では、自然地理学と人文地理学の2つのコースのみであったけれども、その後に環境マネジメントのコースが加えられた。これには昨今の地球環境問題の現出に伴う時代の要請が色濃く反映されていると思われる。

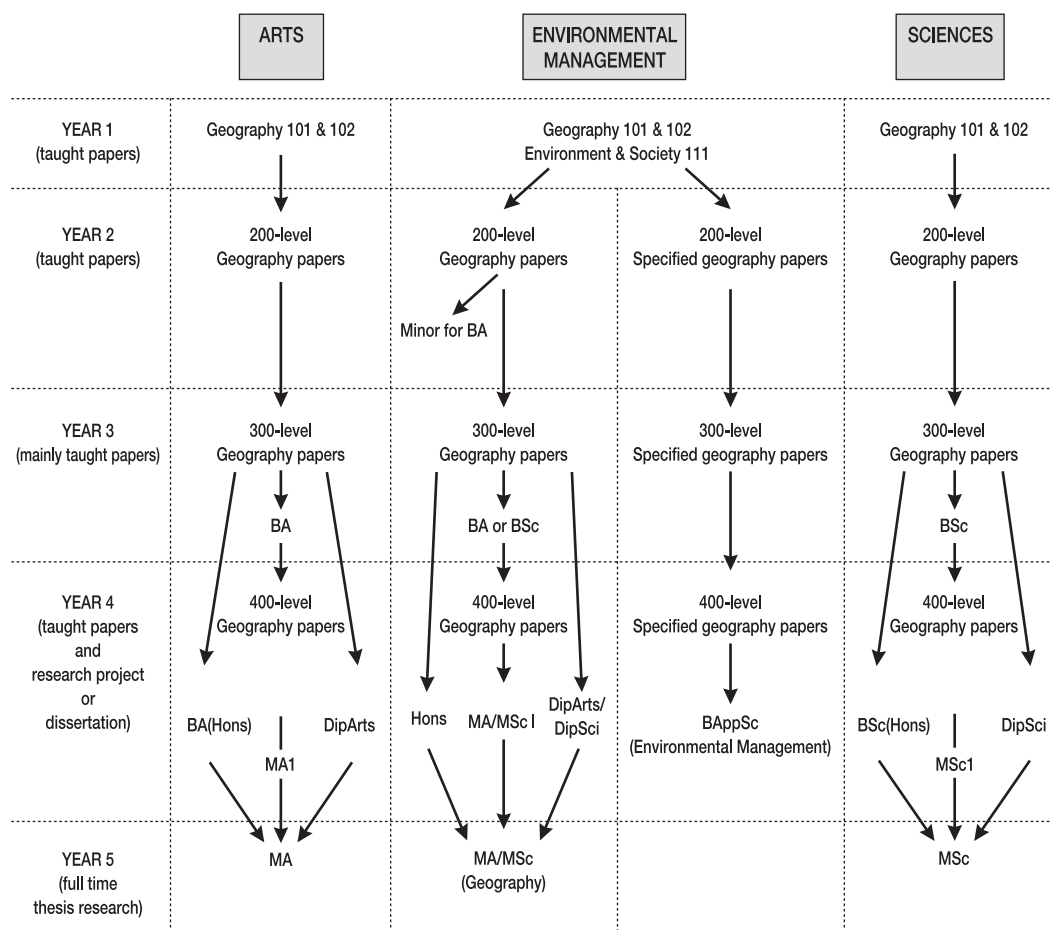
この第3図からも分かるように、通常、学部の課程は3年間であるけれども、オナーズコース(=特別優等課程)に属すれば4年間で、かつ論文作成が追加される。

ここで手元の資料を元にオタゴ大学地理学科のカリキュラムを任意に1997年度、2005年度、2008

年度の3ヶ年度のみながら提示した(第1表)。これらの科目はすべて半期開講(原則6単位)であり、いくつかの同一名称科目が学年別に配置されているけれど、これは主要科目として位置付けて、段階を踏んで履修させる意向の科目でもある。またこの表から分かるように、オナーズコース(第四年次)開講科目は8単位に変わり、研究論文には特別に16単位と大きな重みが付与されている。

1997年度と2008年度を対照すると、この年度間で環境系とプランニング系の科目が新たにいくつか加わっている。それらを敢えて記すと、

Environment and Society, Environmental Management, Developments in Environmental



第3図 NZ・オタゴ大学の地理学専攻におけるプログラム

(Dept.of Geography :2005. による)

第 1 表. NZ・オタゴ大学地理学教室のカリキュラム (すべて半期科目である)

《1997年度》	《2005年度》	《2008年度》
* 100-level=各6単位 GEOG101 ◆Physical Geography 〳 102 ◆Human Geography ENVI 111 —	* 100-level=各6単位 ◆Physical Geography ◆Human Geography Environment and Society	* 100-level=各6単位 GEOG101 ◆Physical Geography 〳 102 ◆Human Geography ENVI 111 Environment and Society
* 200-level=各6単位 GEOG210 Social Geography 〳 211 Geography of the former Soviet Union 〳 212 Third World Development 〳 213 Geography of New Zealand 〳 214 Population Studies 〳 215 Urban Geography 〳 216 Resource Evaluation and Planning 〳 217 — 〳 218 Political Geography 〳 219 — 〳 280A ◆Field Research Methods 〳 280S — 〳 281 Topics in Physical Geography 〳 282 Climatic Change: Present & Future 〳 283 Climatic Change: The Past 〳 284 Soil Nutrient Systems 〳 285 Soil and Groundwater 〳 286 Climatology 〳 287 Ecology of World Vegetation 〳 288 Rivers and Runoff 〳 289 Geomorphology	* 200-level=各6単位 Social Geography — Transformation in Developing Countries Geography of New Zealand — Urban Geography Resource Evaluation and Planning — — — ◆Field Research Methods ◆Field Research Methods Landscapes of Southern NZ Climatic Change: Present & Future Climatic Change: The Past Soil Nutrient Systems Soil and Groundwater Climatology Ecology of World Vegetation Rivers and Runoff Geomorphology	* 200-level=各6単位 GEOG210 Social Geography 〳 211 — 〳 212 Transformation in Developing Countries 〳 213 Geography of New Zealand 〳 214 — 〳 215 Urban Geography 〳 216 Resource Evaluation and Planning 〳 217 — 〳 218 — 〳 219 Geography of the South Pacific Island 〳 280A ◆Field Research Methods 〳 280S ◆Field Research Methods 〳 281 — 〳 282 Climatic Change: Present & Future 〳 283 Climatic Change: The Past 〳 284 Soil Nutrient Systems 〳 285 Soil and Groundwater 〳 286 Climatology 〳 287 Ecology of World Vegetation 〳 288 Rivers and Runoff 〳 289 Geomorphology
* 300-level=各6単位 GEOG379 — 〳 380A ◆Field Research Studies 〳 280S — 〳 381 Social Geography 〳 382 Third World Development 〳 383 Population Studies 〳 384 Urban Geography 〳 385 Resource Evaluation and Planning 〳 386 Political Geography 〳 387 Topics in Physical Geography 〳 388 Climatic Change: Present & Future 〳 389 Climatic Change: The Past 〳 390 Soil Nutrient Systems 〳 391 Soil and Groundwater 〳 392 Climatology 〳 393 Ecology of World Vegetation 〳 394 Rivers and Runoff 〳 395 Geomorphology 〳 396 History of Geographic Thought 〳 397 —	* 300-level=各6単位 Geography of the South Pacific Islands ◆Field Research Studies ◆Field Research Studies Social Geography Transformation in Developing Countries — Urban Geography — — Landscapes of Southern NZ Climatic Change: Present & Future Climatic Change: The Past Soil Nutrient Systems Soil and Groundwater Climatology Ecology of World Vegetation Rivers and Runoff Geomorphology History of Geographic Thought Environmental Management	* 300-level=各6単位 GEOG379 Special Topic in Human Geography 〳 380A ◆Field Research Studies 〳 380S ◆Field Research Studies 〳 381 Social Geography 〳 382 Transformation in Developing Countries 〳 383 — 〳 384 Urban Geography 〳 385 — 〳 386 — 〳 387 — 〳 388 Climatic Change: Present & Future 〳 389 Climatic Change: The Past 〳 390 Soil Nutrient Systems 〳 391 Soil and Groundwater 〳 392 Climatology 〳 393 Ecology of World Vegetation 〳 394 Rivers and Runoff 〳 395 Geomorphology 〳 396 History of Geographic Thought 〳 397 Environmental Management
* 400-level=各8単位 GEOG454 Alpine Geomorphology 〳 455 — 〳 456 — 〳 457 Advanced Urban Geography 〳 458 Population Geography 〳 459 Biogeography 〳 460 Climatology 〳 461 Geohydrology 〳 462 Industrial Geography 〳 463 — 〳 464 An Approved Course in Geography 〳 465 — 〳 466 — 〳 467 — 〳 468 The Middle East 〳 469 Contemporary Rural Geography 〳 470 A Research Topic in Geography 〳 471 Environmental Impact Assessment 〳 472 — 〳 473 — 〳 474 —	* 400-level=各8単位 Alpine Geomorphology — — Advanced Urban Geography — Biogeography Climatology Geohydrology Industrial Geography — An Approved Course in Geography — — — — Contemporary Rural Geography A Research Topic in Geography Environmental Impact Assessment Developments in Environmental Management Contemporary Geographies of South Asia —	* 400-level=各8単位 GEOG454 Alpine Geomorphology 〳 455 — 〳 456 — 〳 457 Advanced Urban Geography 〳 458 — 〳 459 Biogeography 〳 460 Climatology 〳 461 Geohydrology 〳 462 Industrial Geography 〳 463 — 〳 464 An Approved Course in Geography 〳 465 — 〳 466 — 〳 467 — 〳 468 — 〳 469 Contemporary Rural Geography 〳 470 A Research Topic in Geography 〳 471 Environmental Impact Assessment 〳 472 Developments in Environmental Management 〳 473 Contemporary Geographies of South Asia 〳 474 Coastal Management
〳 490 ◎Dissertation = ⑥単位	◎Dissertation = ⑥単位	〳 490 ◎Dissertation = ⑥単位
PLAN433 — PLAN436 —	Environmental Monitoring, Assess. & Reporting Coastal Management and Planning	PLAN411 Planning Theory 〳 412 Evaluation in Planning 〳 435 Planning Case Study 〳 437 Planning Law 〳 438 Planning Practice

Management, Coastal Management, Planning Theory, Evaluation in Planning, Planning Case Study, Planning Law, Planning Practice.

などである。先述したように、これは最近の環境問題の浮上を視野に入れた対応である。さらにその時々々の要請に臨機応変に対応する姿勢の現れと思える科目もいくつか配置されている（例えば、Special Topic in Human Geography）。

また後掲の履修条件を加味すると、初年度に地理学の基礎科目として Physical Geography と Human Geography の履修が義務づけられており、かつ地理学の学問分野を特徴付けている「野外実習」も必修に課されている。しかも、その実習は2年次の“Methods”と3年次の“Studies”に分けて学習の進度に配慮した内容になっている。

ここで比較の意味から、香川（1996）に従ってカナダのプリティッシュコロンビア大学（UBC）地理学教室のカリキュラム<sup>11</sup>を掲げた（第2表）。UBCでは、科目番号のGEO・101（6単位）を除いて1科目＝3単位であり、すべて半期開講科目である。また卒業要件の総単位数は120～126単位となっている。科目の学年配当も入門・基礎系の科目から学年進行とともに応用系・地誌系の科目が多く開講されている。とくにUBCでは、B.of ArtsとB.of Sc.の二つのプログラムがあり、前者は人文地理学専攻に該当し、後者はさらに自然地理学と大気圏科学の2つに分かれている。したがって、全体的に見て開講科目も自ずと自然地理系や大気科学系のそれが細かく配置されている。

一例を挙げるならば、Forest and Agricultural Climatology, Atmospheric Energetics, Atmospheric Phenomena, Methods in Atmospheric Scienceなどがそれに相当する。これには多分に専任教員の専門分野が反映されているむきもある<sup>12</sup>。

また岡（1999）による北欧フィンランドのオウル大学地理学教室のカリキュラムに拠れば、1年次には基礎科目を学び、1年次後半からそれと併行して専門科目を履修可能にしている。さらに2年次のうちに、以下のいずれの専攻課程に進むの

かを選択するシステムとなっている。すなわち、それは①教職専攻、②自然地理学専攻、③人文地理学・地誌学専攻、④応用地理学・地域計画論専攻の4つである。開講科目は基礎系列、主専攻系列、発展科目系列の3系列に区分されている。そこでの地理学科生の「学士」号取得の要件には120単位が要求され、そのうち70単位前後は学科外の科目から修得しなければならない。加えて、野外実習に求められる参加日数は専攻課程によって異なるものの、数十日とかなり多くの日数が求められている。

ここで学部や学科の設置経緯などの違いを度外視して、2008年度の本学地理学科のカリキュラムと比較してみたい。1年次に必修の「地理学概論」を配置している点、「野外実習」に力を注いでいる姿勢、卒論作成に重きを置いている内容などはほぼ共通している。しかし、その一方でオタゴ大学では自然地理学系列の科目が充実しているのに加えて環境系やプランニング系の科目も本学より多い。けれども、本学には地形図に関する作業・演習・講義、および測量系の科目などが開講されている。さらに科目の多様さの面では、地誌系列の科目などで本学のカリキュラムに多少、幅があると見える。これらのカリキュラムをもとに学位取得への履修条件に着目してみたい（第3表）。卒業までの所要総単位数は120単位であり、それを学年毎の履修単位数、および主専攻で求められている履修条件を勘案しながら、最終的に満足させねばならない。また「地理学」の学際的な学問としての位置付けを投影して、“BA of Arts”と“BA of Sc.”の2種類の学位が用意されている。前者は主に人文地理学に重心があり、後者は自然地理学にそれが置かれた姿と言える。これは先のUBCの場合と共通しているし、そのままオナーズコースにも踏襲されている。また上の2種類の学位によって要求されているハードルが若干、異なる。つまり“BA of Sc.”の取得の方が“BA of Arts”のそれよりも主専攻の単位数などの点で多く課されている。

ここで地理学科のカリキュラムとも多分に関連



するであろう教室スタッフの陣容を一覧してみたい (第 4 表)。ちなみに、教壇に立つ教員はすべて“PhD”の取得が前提である。この表から最近の 10 年余りで教員の異動が比較的多く見られる。これには語学の壁が少ない面も相乗的に作用し、欧米を睨んだ上でのステップアップを図ろうとする

姿勢の現れと現地滞在中に伺われた。と言うのも、滞在中に多くの助言をしてくれた地理教室の秘書 (女性) は英国から来ていたし、新しいスタッフも公募の結果、英国から着任した。さらにまた、大学と教員間での終身雇用的な考えは希薄であり、各自の人生設計を頭に入れて行動しているように

第 2 表. カナダ・ブリティッシュコロンビア大学地理学教室のカリキュラム

(下記の開講科目は 1995～1996 年度の内容であり、すべて前期か後期の半期科目である)

科目番号	科目の主題	科目番号	科目の主題
101-1	Introduction to Physical Geography	372	Cartography
101-2	Introduction to Physical Geography	373	Introductory Remote Sensing
101-3	Introduction to Physical Geography	374	Statistics in Geography
102	Introduction to Climate & Biogeography	375	Spatial Data Analysis
103	Introduction to Terrestrial Physical Geography	379	Field Course in Human Geography
121	Geographical Change in the Modernizing World I	380	Introduction to the Geography of Monsoon Asia
122	Geographical Change in the Modernizing World II	390	Geography of Selected Regions
200	Weather & Climate	391	Geography of Europe
204	Forest & Agricultural Climatology	395	Introduction to the Geography of the Americas
205	Introduction to Hydrology	401	Urban Meteorology
207	The Geography of Ecosystems	402	Air Pollution Meteorology
210	Vancouver & Its Region	403	Global Climate & Climate Change
290	Introduction to the Geography of Canada	405	Fluvial Geomorphology
300	Weather & Climate II	406	Hillslope Geomorphology
301	Atmospheric Energetics	407	Directed Studies in Physical Geography
302	Atmospheric Phenomena	408	Snow & Ice Processes
303	Methods in Atmospheric Science	410	Geography & Resource Analysis
306	Principles of Geomorphology	417	Physical Environment of the City
308	Quaternary & Applied Geomorphology	422	Modes of Subsistence
309	Field Course in Physical Geography	423	Attitudes Toward the Environment
310	Environment & Resources	425	Historical Geography of China
315	Environmental Inventory & Classification	426	Historical Geography of BC I
316	Geography of Natural Hazards	428	Historical Geography of BC II
317	Physical Environment of BC	440	Power, Knowledge & Human Geography
318	Environmental Change & Quality	448	Directed Studies in Geography
319	Environmental Impact Assessment	449	Honours Essay
321	Historical Geography of Urbanization	450	Urban Analysis
327	Historical Geography of I	453	Political Geographic Analysis
328	Historical Geography of II	457	Social & Behavioural Geography
329	Introduction to Political Geography	460	Geography of Manufacturing
345	Geographic Thought & Practice	464	Spatial Interaction
350	Introduction to Urban Geography	468	Geography of International Economic Systems
352	Geography of Third World Urbanization	472	Advanced Geographic Information System
357	Introduction to Social & Behavioural Geography	481	Geography of Japan
360	Geography of Retail, Wholesale & Service Activities	484	Geography of Southeast of Asia
361	Introduction to Economic Geography	485	Geography of China
362	Geography of Economic Development	493	Geography of Eastern Europe
363	Geography of Resource Industries	494	Geography of the Ex-Soviet States
370	Introduction to Geographic Information & Its Analysis	495	Selected Latin American Habitats
371	Research Strategies in Human Geography	499	Economic Social Geography of Canada

(香川：1996による)

第3表. NZ・オタゴ大学地理学専攻の学士取得への履修条件

(~~~~~)の箇所は2005年度以降に変更になっている部分)

<p>☆(1). 合計で120単位以上の単位取得</p> <p>(2). 200-Level以上の科目で60単位取得</p> <p>(3). 300-Level以上の科目で24単位取得</p> <p>(4). 各主専攻で要求されている条件を充足</p>
<p>◆BA of Artsを取得の場合</p> <p>(1). 各主専攻で要求されている条件 =主専攻『Geography』の場合</p> <p>1年次/100-Levelの指定2科目取得</p> <p>2年次/200-Levelで“Field Research Methods” + 12単位取得</p> <p>3年次/300-Levelで“Field Research Studies” + 16単位取得 ⇒+18単位取得</p>
<p>◆BA of Sc.を取得の場合</p> <p>(1). 各主専攻で要求されている条件 =主専攻『Geography』の場合</p> <p>1年次/100-Levelの指定2科目取得 ⇒指定3科目取得</p> <p>2年次/200-Levelで“Field Research Methods” + 13.5単位取得 ⇒+指定科目1ペーパー+指定科目6単位取得</p> <p>3年次/300-Levelで“Field Research Studies” + 16単位取得 ⇒+指定科目2ペーパー+指定科目6単位取得</p>
<p>★Honours &amp; Dip. of Art取得の場合</p> <p>(1). 各主専攻で要求されている条件 =主専攻『Geography』の場合</p> <p>1年次/100-Levelの指定2科目取得 + 30単位取得</p> <p>2年次/200-Levelで“Field Research Methods” + 16単位取得 + 2~3のペーパー ⇒+指定科目18単位取得+指定科目3ペーパー</p> <p>3年次/300-Levelで“Field Research Studies” + “History of Geographic Thought” + 16単位取得 + 2~3のペーパー ⇒+指定科目12単位取得+指定科目3ペーパー</p> <p>4年次/“Dissertations” + 40単位 + 1ペーパー ⇒+指定科目3ペーパー, ないし認定された研究計画書提出</p>
<p>★Honours &amp; Dip. of Sci.取得の場合</p> <p>(1). 各主専攻で要求されている条件 =主専攻『Geography』の場合</p> <p>1年次/100-Levelの指定2科目 (3科目が望ましい) 取得 + 36単位取得</p> <p>2年次/200-Levelで“Field Research Methods” + 指定科目24単位取得 + 他科目18単位取得 ⇒+指定科目2ペーパー+指定科目12単位取得+他科目12単位取得</p> <p>3年次/300-Levelで“Field Research Studies” + “History of Geographic Thought” + 指定科目16単位取得 + 他科目18単位取得 ⇒+指定科目2ペーパー+指定科目6単位取得+他科目12単位取得</p> <p>4年次/“Dissertations” + 指定科目48単位 + 1ペーパー ⇒+指定科目4ペーパー, ないし認定された研究計画書提出</p>
<p>◆Masters (M. of Arts, M. of Sc.)</p>
<p>◆Doctorate (PhD)</p>

第 4 表. NZ・オタゴ大学地理学教室の教員スタッフ一覧

	1997年度	2005年度	2008年度
Head of Dept. Geogr. Professors 〃	R. Welch P. Holland —	R. Morgan T. Binns —	S. Fitzsimons T. Binns R. Morgan
Associate Professors 〃 〃	B. Fitzharris B. Heenan A. Memon	S. Fitzsimons R. Morgan —	S. Fitzsimons C. Freeman E. Nel
Senior Lecturers 〃 〃 〃 〃	R. Morgan D. Murray R. Welch — —	C. Freeman M. Hilton R. Panelli M. Thompson-Fawcett R. Welch	M. Hilton A. McGregor H. Power M. Thompson-Fawcett R. Welch
Lecturers 〃 〃 〃 〃	S. Fitzsimons W. Harris M. Hilton R. Law R. Liepins	D. Collins A. McGregor L. McKergow H. Power —	C. Chambers N. Cullen D. Hill L. Malam J. Orwin
Professional Practice Fellows Emeritus Professors 〃	— — —	— B. Fitzharris P. Holland	J. Stephenson B. Fitzharris P. Holland
Administrative Secretary Secretary	K. Henderson P. Fraser	K. Henderson P. Fraser	N. Hunt C. Bradshaw
Programmer Cartographer & Graphic Designer Technician Officer Head Technician Technicians 〃	R. Jackson — W. Mooney — D. Howarth J. Fletcher	R. Jackson — W. Mooney D. Howarth J. Clark D. McDowall	D. McDowall T. Connolly — D. Howarth J. Clark N. McDowall

も見えた。現実に定年前なのに早々にリタイアして、悠々自適な生活を満喫している知人も居る。これには公的な社会福祉制度の充実度も大きく絡んでいる。

教室主任には Senior Lecturer 以上のスタッフで年齢や実績を加味しつつ交互に就いているようである。教授枠は 1～2 名程度、助教授枠は 2～3 名である。とくにこれらのスタッフで注目されたのは “Administrative Secretary (行政・管理秘書)” のポストとその権限の有無である。実務上で単なる秘書とは大きな開きがあった。またプログラマーやパソコン操作を担当するテクニシャン、さらには地理独特とも言える作図作業担当専門員などを教室として抱えており、教員や学生への支援態勢が整っている点は素直に評価せざるを得な

い。例えば、気候学者の知人が自分の研究のアイディアをもとに数値データの処理や最適な図表現の作成をテクニシャンや作図担当専門員に指示している光景を頻繁に目にしたのは、その一端と言えよう。

#### Ⅳ. おわりに

「地理学」は古い学問である。その淵源は遠くて古代ギリシャ・ローマ時代に遡る。Geography (地理学) の “geo” は「土地」を示し, “graphia” は「記述」という意味である。かくして土地を記述するために人間は自らの居住空間を如何に理解し, より適した空間世界をつくるかに努めた。その過程で他所を探検して地理的知識の拡大を図る

とともに、今日の他の多くの学問の誕生を促した。ここに地理学が“諸科学の母”とも呼称され、周辺諸科学との関係性を強く保有する学問の地位を得た。ストラボンやプトレマイオスはこの古代の地理学を代表する人物であるが、その後続く時代での様々な統制や制約で中断・衰退期を経て18世紀以降の近代地理学の成立へと至る。

ドイツやフランスを中核にして萌芽した近代地理学の影響は、イギリスのみならずアメリカにも波及して、その後にわが国にも及んだ。NZや豪州にはイギリスによる植民地化を経て独立した経緯からイギリスの影響が色濃く残っている。その一端はNZの高等教育界にも伺われ、実際、オタゴ大学の卒業式は卒業要件を満たし次第、年に数回執り行なわれる。これはかつて試験答案を本国イギリスへ船便で送付しては採点を要請し、採点済み答案が逐次、また船便で返送されてきた後に単位集計を行ない、卒業要件クリアの都度、該当者に卒業証書の授与を実施していた旧い時代の名残りらしい。

かつての宗主国・イギリスの影響を強く被っているNZの、しかも旧い学問である「地理学」を教室として抱えているNZ最古のオタゴ大学に着目して、今日のカリキュラム内容を比較することは、「地理学」に対する欧米人の思慮・力点を計る意味でも興味をそそる点である。その意図からここに若干の紹介を試みた次第である。今後のカリキュラム検討の一助になれば、望外の喜びでもある。

#### 謝 辞

本報告をまとめるにあたって、関連資料の提供や便宜を計ってくれたNZ・オタゴ(Otago)大学地理学教室のスタッフに厚くお礼を申し上げたい。とくに1997～1998年に客員研究員として教室への受け入れに尽力してくれたDr.R.Welchをはじめ、Dr.B.FitzharrisやDr.P.Hollandにはこの場を借りて心より謝意を表したい。

#### 注 記

- 1) このカリキュラム一覧は、1995年から1996年にかけての開講科目を示している。
- 2) この教室には都市気候学の分野で著名なT.Oke教授が所属していた。そのせいか多彩な大気科学関連の科目が開講されている。

#### 参 考 文 献

- 青柳まちこ編(1997)：もっと知りたいニュージーランド。弘文堂，275p.
- 井田 仁康(1996)：ラブラリーニュージーランド。二宮書店，200p.
- 岡 康隆(1999)：海外地理学教室の紹介：フィンランド・オウル大学。法政地理，29，p54～59.
- 香川 貴志(1996)：ブリティッシュコロンビア大学地理学教室の教学システム。日本地理学会予稿集(1996年度秋季学術大会)，50，p48～49.
- 佐藤 典人(2000)：ニュージーランドの自然の素顔。法政地理，32，p9～30.
- 朝永 宗彦(1999)：オーストラリアの観光と食文化。学文社，176p.
- 中村和郎・高橋伸夫編(1988)：地理学への招待。古今書院，196p.
- ニュージーランド学会編(1998)：ニュージーランド入門。慶応義塾大学出版会，326p.
- 橋爪 若子(1985)：オーストラリア入門。古今書院，190p.
- 橋爪 若子(1992)：アオテアロア。古今書院，150p.
- 堀 武昭(1988)：オーストラリアの日々。日本放送出版協会，208p.
- Dept. of Geography(2005)：Geography at Otago Course Information 2005. Univ. of Otago，62p.
- R.Kirkpatrick(1996)：Macmillan New Zealand World Atlas. Macmillan，140p.
- Univ. of Otago(1998)：Undergraduate Course Information 1998. J.McIndoe Ltd.NZ，288p.
- D.Zwartz(1997)：NZ Official Year Book 1997. GP Publications. 645p.